

## ホロコーストの「映像資料」

- オレールの画集『目撃者、アウシュヴィッツのイメージ』より -

加 藤 一 郎

## “Vidaj dokumentoj” pri la Holokaŭsto

- el la albumo de David Olére “*Witness Images of Auschwitz*” -

KATO Iĉiro

Estas malriĉaj la “vidaj dokumentoj”, kiuj prezentas la realecon de la Holokaŭsto. Krome, absolute ne ekzistas “vidaj dokumentoj”, kiuj prezentas la proceson de la masaj ekzekutoj en la “gasaj ĉambroj” de la koncentrejoj de Auschwitz, la simbolon de la Holokaŭsto. En tiu situacio publikis la albumo de David Olére, kiu mem estis la prizonulo de Auschwitz kaj tuj post la liberiĝo skizis kelkajn skizojn pri la proceso de la masaj ekzekutoj. Pro tio la ortodoksaj historistoj pri la Holokaŭsto prezentas la skizojn de David Olére kiel “vidajn dokumentojn” de la proceso de la masaj ekzekutoj. Sed, en tiuj skizoj ekzistas multaj eraroj kaj misprezentadoj.

### <はじめに>

すでにホロコースト修正派の多くが指摘してきたように、第二次大戦中に生じたユダヤ人の悲劇、いわゆるホロコーストの実態については、その多くが、法医学的検証、科学的＝化学的証拠、物的証拠にもとづくのではなく、しばしば誤りや誇張、記憶違いを含みがちな戦後の「目撃

証言」や色々な解釈の余地があるドイツ側文書資料にもとづいて語られてきた。

さらに、ホロコーストの実態をビジュアルに伝えるような「映像資料」は、きわめて乏しく、その取り扱いについても慎重に対処しなくてはならないものが多い。ホロコーストを扱った映画も数多く存在するが、ホロコースト「正史」の枠組みを支持するフォルジュでさえも、最近邦訳された研究書のなかで、「ショアーと収容所の歴史を教えるために利用できる映画はいろいろあるけれども、書物の場合と同様に、注意深い批判精神が必要とされる。作品の真面目さを疑わせずにはおかない誤謬に満ちた遺憾な拙速さを一つとして示さないような映画は稀だと言わなければならない」<sup>1</sup>と警告しているほどである。

とりわけ、ホロコーストの象徴ともされるアウシュヴィッツ・ビルケナウ収容所での「殺人ガス室」と焼却棟および大量ガス処刑のプロセスについては、スピルバーグの「シンドラーのリスト」その他の劇映画による想像イメージをのぞいて、現場を撮影した写真やフィルムなどの映像資料は皆無である。このために、これまでに刊行された、ホロコーストに関する映像中心の書籍は、おおむね、次のような構成で、ホロコーストのイメージを映像的に伝えてきた。

- ① 迫害について：ナチス・ドイツ時代の「水晶の夜」などの写真やフィルム。



(炎上するシナゴグ)

- ② 移送について：移送者を満載した列車、目的地に到着して「選別」を受ける収容者の群れを撮影した写真やフィルム。



(いわゆる「選別」)

- ③ 虐殺および処刑について：第二次大戦中のパルチザンやレジスタンスなどに対する絞首刑や銃殺現場を撮影した写真やフィルム。
- ④ 収容所について：戦時中、戦後に収容所やユダヤ人ゲットーの様子を撮影した写真やフィルム。
- ⑤ 「殺人ガス室」について：

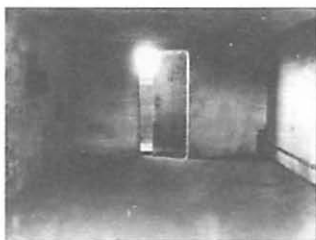
(a) ダッハウ収容所の「ガス室」を撮影した戦後の写真やフィルム（戦争直後には「殺人ガス室」であり、ガス処刑が行なわれていたと喧伝されていたが、今日では、ホロコースト派によれば「使用されたことはなかった」、ホロコースト修正派によればそもそも「殺人ガス室」ではなかったとされている）。



(「ガス室」のドアのまえの米兵)

(b) アウシュヴィッツ中央収容所の焼却棟Ⅰの「殺人ガス室」を撮影した戦後の写真とフィルム（戦後、「目撃証言」その他にもとづいて、ポーランド政府が「殺人ガス室」として復元したもの。ホロコースト派は、焼却棟Ⅰの死体安置室は「殺人ガス室」に改

造され、のちに防空シェルターに改築されたと主張しているが、ホロコースト修正派は「殺人ガス室」に改造された物的証拠、科学的＝化学的証拠は存在しないと論じている）。



(焼却棟Ⅰの「ガス室」)

(c) ビルケナウ収容所の焼却棟Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴを撮影した戦時中の写真、および廃墟と化した建物を撮影した戦後の写真とフィルム（ホロコースト派は、焼却棟Ⅱ、Ⅲの地下の死体



(焼却棟Ⅱの「ガス室」の残滓)

安置室、Ⅳ、Ⅴの地上の部屋が「殺人ガス室」であったと主張しているが、ホロコースト修正派は、この説にも根拠がないと論じている)<sup>2</sup>。

- ⑥ 大量死あるいは大量虐殺について：アメリカ軍、イギリス軍がベルゲン・ベルゼン、ブッヘンヴァルト、ダッハウなどの西部地区収容所を解放したときに発見した、



(ベルゲン・ベルゼン収容所の大量の死体の山)

裸で痩せ細った大量の死体の山を撮影した戦後の写真とフィルム（これらの大量の犠牲者の死因は「ガス処刑」によるものではなく、チフスその他の疫病および栄養失調であった。西部地区の収容所はそもそも「殺人ガス室」をそなえておらず、大量「ガス処刑」は行なわれなかったからである。大量「ガス処刑」が行なわれたとされるアウシュヴィッツ・ビルケナウその他の収容所については、これに匹敵するような、裸で痩せ細った大量の死体の山を撮影した戦後の写真とフィルムは存在しない<sup>3</sup>。

最近、毎日新聞社が『20世紀の記憶』シリーズとして刊行した『ホロコースト』<sup>4</sup>も、おおむね、この①から⑥の線に沿って、副題にもあるような「絶滅収容所の記憶」を「映像的」に伝えようとしている。しかし、ここでも、大量ガス処刑のプロセス（脱衣室での犠牲者の脱衣→「殺人ガス室」への入室→チクロンBから放出される青酸ガスによるガス処刑→犠牲者の死体の搬出→焼却炉への死体の投入）自体を撮影した写真は掲載されておらず、「ガス室行きと選別された・・・」というキャプションをつけた囚人の群れの写真が掲載されているだけである。また、アウシュヴィッツ・ビルケナウ国立博物館が刊行した『アウシュヴィッツ：写真のなかの歴史』<sup>5</sup>も同様に、大量ガス処刑のプロセス自体については、ポーランド人画家 Jerzy Adam Brandhuber の描いた「ガス室に向かう階段を下りていく光景」、「ガス室の内部」と題するスケッチを掲載しているだけである<sup>6</sup>。しかも、Brandhuber についての人物紹介文は、「何枚かのブランドフーバーの絵は、ガス室の光景を描いているが、彼は実際には特別労務班（死体処理を担当する囚人部隊――筆者）の一員ではなかった」<sup>7</sup>と記しており、ガス処刑を描いた彼の絵がまったくの想像画であることを認めてしまっているのである。

大量ガス処刑のプロセス自体についての「映像資料」が存在せず、ホロコースト修正派が法医学的、科学的＝化学的見地から、大量ガス処刑のプロセスに様々な疑問を提出し、ホロコースト正史の根幹（「殺人ガス室」および焼却棟を使用した大量ガス処刑によるユダヤ人の絶滅）が動揺し始めているという状況の中で刊行されたのが、オレールの画集『目撃者、アウシュヴィッツのイメージ』<sup>8</sup>であった。

1902年ワルシャワ生まれのポーランド系ユダヤ人のオレールは、戦前にパリに移住し、当地で芸術活動を展開していた。しかし、1943年2月に、逮捕されて、ほかのユダヤ人とともに、アウシュヴィッツに移送され、焼却棟Ⅲでの死体処理に従事する囚人「特別労務班」の一員となった。ドイツの敗戦直前に、オーストリアの収容所に移送され、当地でアメリカ軍によって解放されたのちすぐに、自分の収容所体験についてのスケッチを描き始めたという<sup>9</sup>。こうした経歴を持つオレールは、彼の画集の推薦文<sup>10</sup>によれば、「アウシュヴィッツを生き残った唯一の画家」なのであり、彼のスケッチは、「戦後まで写真家が立ち入ることのできなかった焼却棟その他の場所で実際に何が起こったのかを描くために、ガス室、炉、検査室での作業員としての自分の経験を描いた」という意味で、大量ガス処刑のプロセスに関する「映像資料」の欠如という「空白」を埋めるものとされた。ホロコースト史家のペルト(R.J. van Pelt)も、アーヴィング裁判<sup>11</sup>に提出された報告書の中で、「彼のスケッチは、焼却棟Ⅲのガス室と焼却炉についての非常に重要な映像記録である」と高く評価して、彼のスケッチ<sup>12</sup>にもとづいて、焼却棟Ⅲの構造を解説しているほどである<sup>13</sup>。それゆえ、画集の推薦文は、「本書は、きわめて歴史的な価値の高い遺産である。多くの人々がホロコーストの存在を実際に否定しているときに、我々は、この重要な目撃映像証拠をはじめて刊行することを決定した。・・・この作品は、ホロコーストを経験した

ことのない人々、未来の世代全員が、無制限の権力をもった政治制度が行なうことのできた恐るべき残酷さを、オレールの目を介して、目撃することができるようにするために出版された」と述べて、オレールのスケッチの「映像的証拠」としての意義を高く持ち上げている。

しかし、はたして、オレールの一連のスケッチは、「重要な目撃映像証拠」といえるのだろうか。

本小論は、大量ガス処刑のプロセスに関する「目撃映像証拠」とされたオレールのスケッチを取り上げて、今日までの実証的なホロコースト研究の成果を踏まえて、その「目撃映像証拠」としての価値を検証すると同時に、これまで描かれたり、語られたりしてきたホロコーストのイメージがはらんでいる問題点を考察しようとするものである。

#### <焼却棟Ⅲの外観>



『アウシュヴィッツ 2 ビルケナウ、焼却棟Ⅲ』と題する 1945 年の作品である。

問題点①：炎と黒煙を噴き上げる焼却棟の煙突

アウシュヴィッツ・ビルケナウの焼却棟に関する多くの「目撃証言」が、焼却棟の煙突が噴き上げる炎と黒煙について言及しており<sup>14</sup>、また、おそらくそれにもとづいたスピルバークの『シンドラーのリスト』も、「ガス室」に向かう犠牲者の背景に、煙突から赤々と炎と黒煙を噴き上げる焼却棟を描いている。

しかし、ホロコースト修正派は、焼却棟の煙突が炎と黒煙を噴き上げていたという「目撃証言」が虚偽であると批判してきた。例えば、マットーニョ (C.Mattogno) は、「これは技術的に不可能である。室から出てくる不燃焼ガスは、必要な発火温度と燃焼空気があれば、煙突のなかで燃焼してしまうし、これらの条件がなければ、燃焼されないまま、炉から出てくる（とくに、窒素、二酸化炭素、水蒸気、最小限の量の二酸化硫黄）。前者の場合、完全に燃焼したガスが煙突から出てくるし、後者の場合、煙が出てくるだけである」<sup>15</sup> と批判している。また、ルドルフ (G.Rudolf) も上掲のオレールの絵を直接取り上げて、「この画家は嘘をついている」、この絵は「宣伝目的の（“芸術的”）詐欺である」と断定している<sup>16</sup>。

さらに、ホロコースト派のフォルジュでさえも、炎についての証言は「あまりにも多く幻覚にすぎないと片づけるわけにはいかない」としながらも、「これらのイメージは誇張されすぎている」と述べているし、黒煙についても「設計上からいっても、このような建物の煙突から、それほど巨大な煙が吹き出すことはありそうもないし、不可能にさえ思える」と、炎と黒煙を噴き上げる煙突のリアリティのなさ認めてしまっている。フォルジュによると「火のイメージ」は、焼却棟の実態というよりも「地獄の創造のシンボル」、「おそらく燃えさかる火の巨大さと恐怖について迫真力を生み出すのにもっとも強いイメージ」であるという。<sup>17</sup>



しかし、「巨大さと恐怖についての迫真力を生み出す」ために、噴き上がる炎と黒煙が付け加えられているとしたならば、このスケッチは、実態を正確に表現している「目撃映像証拠」ではなく、たんに人々の恐怖心をいたずらにあおる地獄絵と同じレベルものになってしまうのではないだろうか。

問題点②：「もっとも健康な若い女性だけが、兵士の慰安に選別されるが、これもまた死を意味する」という息子アレクサンドルの解説文<sup>18</sup>。

このような表現は、若い女性収容者すべてが、ドイツ人看守や衛兵の性的犠牲者となったかのような印象を与えるだけであるが、実は、オレール自身のスケッチにも、読者の俗物的な関心を誘いがちな、「煽情的な」、「ポルノグラフィ」まがいのものが多い。



『母と娘 裸の美女』



『実験台』

＜ガス処刑＞

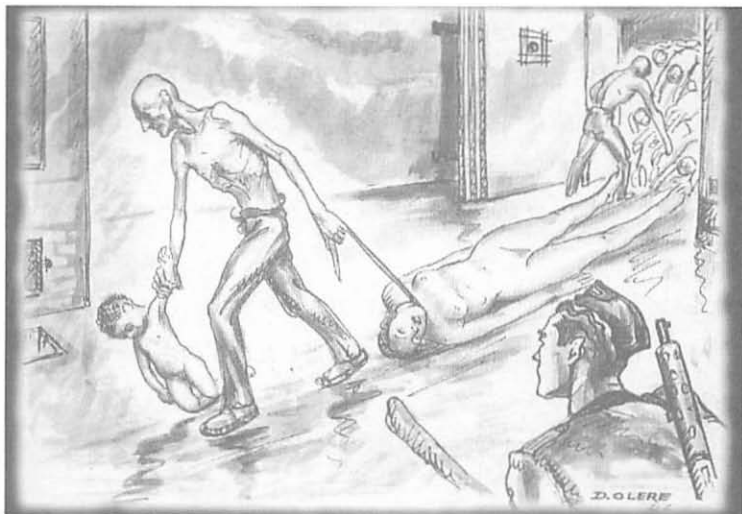


『ガス室での窒息』と題する製作年代不詳の絵画である。原版は色彩画であることから、オレールが解放直後に作成した一連のスケッチとは異なり、戦後かなり経ってから製作したものであろう。

問題点：息子アレクサンドルの解説文<sup>19</sup>にも、「ガス室の中の窒息のプロセスを撮影できたものは誰もい

なかった」とあるように、明らかに、この絵は、「目撃映像証拠」ではなく、想像画である。たとえ、生存者の「目撃証言」にもとづいていたとしても、青酸ガスを放出するチクロンBの丸薬が出てきているチクロンBの缶が地面に転がっている点はホロコースト正史（焼却棟Ⅱと焼却棟Ⅲでは「ガス室」の天井の穴から、焼却棟Ⅳと焼却棟Ⅴでは、ガス室側面の窓から、チクロンBの丸薬だけが投入されたことになっている）とは異なっている。したがって、オレールが、自分自身や他人のイメージを混じり合わせて、作り上げたものにすぎないこの絵に、「写真のような質と現実的な正確さを持つこの絵は、世界で利用することができる唯一の資料である」といった解説をつけることには、問題がある。

＜ガス室からの死体の搬出＞



『次の集団のためにガス室を清掃する』と題する 1946 年のスケッチである。スケッチに付けられたアレクサンドルの解説文はこうである。

「ガス処刑の後に、我々は、部屋から死体を引き出さねばならない。尿、生理血、血、糞で湿った床の上を死体を引きずっていく。滑っていく。・・・ついで、犠牲者を炉に投入するまえに、髪を切り、金歯を探すチームに死体を見せなくてはならない。『早く！ 早く！ もっと早く 豚どもめ！ 早くしないと、次のグループに入れて、ガス室送りにするぞ。』次のグループはもうトラックに乗っている。」

問題点①：ガスマスクを装着していない「特別労務班」の作業員

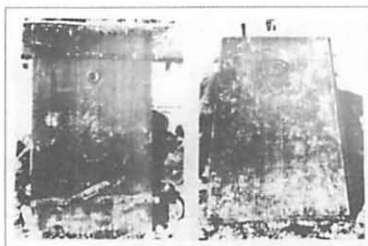
「ガス室」から死体を引き出した「特別労務班」の作業員が、ガスマスクをつけていたのかどうか、重大な論点となったのは、ツンデル裁判でのヒルバーグに対する尋問においてであった。アウシュヴィッツ収容所長ルドルフ・ヘスが、作業員はガス処刑直後の死体搬出作業のときに、「食べたり、タバコを吸ったりしていた」と「自白」していたので、

彼らはガスマスクをつけていたかどうかが問題となったからである。ホロコースト派のヒルバークは、死体搬出作業について、「ガスマスクをつけた人々が、死体を引きずり出すためにガス室に入りました。歯が引き抜かれました。金歯が引き抜かれ、それは、溶かされてドイツ政府のものとなりました。毛髪は必要ならば、この時点で切られました」<sup>20</sup>と証言しており、明らかに、作業員はガスマスクを装着していたと断定している。

ホロコースト「正史」では、作業員はガスマスクをつけて死体を搬出したという。しかし、実際にこの作業を担当したはずのオレールのスケッチでは、作業員はガスマスクをつけずに死体を搬出している。ホロコースト「正史」、「目撃映像証拠」とされているオレールのスケッチのどちらが、真実なのであろうか。

問題点②：のぞき穴を持つ三重の外開きのドア

(a) オレールのスケッチでは、「ガス室」（死体安置室1）のドアにのぞき穴が描かれている。ホロコースト派は、のぞき穴の存在を焼却棟Ⅱ、Ⅲの死体安置室1が「殺人ガス室」であった証拠とみなしている。この部屋が、死体その他の保管・殺菌消毒だけに使われたとしたならば、のぞき穴は必要ではないというのである<sup>21</sup>。これに対して、ホロコースト修正派ルドルフは、死体安置室1は一時期、殺菌消毒機能を備えていたことがあり、アウシュヴィッツ収容所の通常の殺菌消毒施設のドアにはのぞき穴がついているので、のぞき穴の存在は少しも不自然なことではないと指摘している<sup>22</sup>。また、ホロコースト修正派のクロウエルによると、焼却棟Ⅱ、焼却棟Ⅲの地下室は、防空シェルターとしても利用され、防空シェルターのドアはのぞき穴をかならず備えていたので、のぞき穴の存在は当然のことであったという<sup>23</sup>。



(アウシュヴィッツ・ビルケナウ収容所から  
発見されたとされるのぞき穴のついたドア)



また、右の写真は、あるホロコースト派のサイト<sup>24</sup>が、「アウシュヴィッツのガス室のドア」とのキャプションをつけて、掲載しているものである。解説によれば、この写真は、1945年2月にソ連の調査委員会によって撮影されたものである。しかし、「有毒ガス！ 入室危険」との警告板がつけられているようなドアが、入浴と偽って犠牲者を入室させたとされる「殺人ガス室」のドアであろうか。

(b) オレールのスケッチは、三重のドアを描いているが、ホロコースト正史によれば、「二重」のドアである。

(c) オレールのスケッチは、外開きのドアを描いている。ホロコースト派のペルトは、当初、内開きに設計されていた焼却棟Ⅱ、Ⅲの死体安置室1のドアが、のちには、外開きに変更された事実を、この部屋が「殺人ガス室」として使われた証拠とみなしている<sup>25</sup>。内開きのままでは、入り口のドアに殺到した犠牲者の死体の山のために、ドアを開くことができないというのである。これに対して、ホロコースト修正派のルドルフは、「死体安置室1のドアが内開きから外開きに変更されたことについては、簡明に説明することができる。焼却棟は、収容量が限られていたので、通常、疫病で死亡した死体を

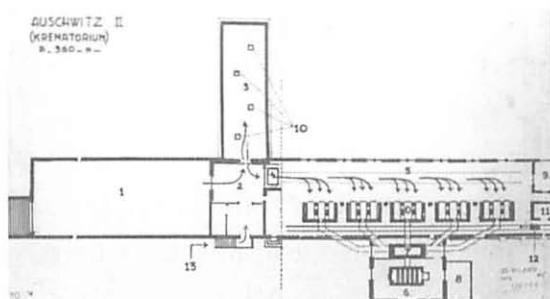
保管する死体安置室を備えていた。発疹チフスなどの疫病はビルケナウ収容所で多くの生命を奪い、死体安置室1は吸気・排気設備を備えた唯一の死体安置室であったので、疫病の犠牲者は一時的にここに保管されたのであろう。保管死体から発する悪臭のガスが建物のほかの部屋に入ることを防ぐために、機能的な換気設備は、このような死体安置室の内部気圧をわずかに低くする。このような環境のもとでは、どのような二重ドアも、しっかり閉まるために、外開きでなくてはならないであろう」<sup>26</sup>と、外開きに変更された技術的理由を明らかにしている。また、弱い木製のドアでは、「ガス室」に入って事態を察知し、入り口に殺到する「数百のパニックに陥った人々」を阻止することはできないとも批判している。

- 
- 1 ジャン＝F.フォルジュ、高橋武智訳『21 世紀の子供たちに、アウシュヴィッツをいかに教えるか?』、作品社、2000 年、72 頁。
  - 2 フォルジュは、ロッシフの映画『ニュルンベルクからニュルンベルク』のなかでのガス室の取り扱いについて、「・・・映像なしではすまされないある種の映画作家の見つけ出したへたくそな解決策を典型的に示すものとなっている。ガス室に関する語りを映像上で明示するのに、ハンドルと配管網のノズルを撮影してみせ、殺人用ガスが到着する道程を追う印象を与えているけれども、映画がつけられた 1989 年には、このようにしてガスがガス室に入ってきたわけではないことがずっと以前から知られていた」と、また、有名なアラン・レネの作品『夜と霧』のなかでのガス室の取り扱いを、「映画がガス室を見せようと意図するとき、問題はさらに一層微妙となる。これといった同定のしようなない建物がガス室として提示されるが、今ではそれがマイダネク収容所のバラックの一つだと見分け

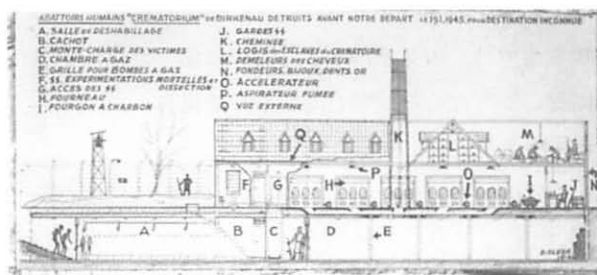
ることができる。次のカットは、もしかするとガス室かもしれぬシャワー室を示すが、マイダネク収容所のシャワーは、今日この収容所では、本物のシャワーとして展示されている」、とそれぞれを批判している。前掲書、73-75 頁。

- 3 フォルジュは、ベルゲン・ベルゼン収容所での大量死の写真をガス処刑に結びつくものとして暗示する手法を、「このようなやり方は収容所の記憶の伝達にとって、とりわけ有蓋であると言わなくてはならない。これらの映像に動転した人々は、ショアの犠牲者のほとんどが飢餓のために死んだはずではなかったことがわかっているだけに、ベルゲン＝ベルゼンには決してガス室がなかったという事実を知るまでは、ガス室のドアを実際に開いた場面を見たと思えることになるからだ」と批判している。前掲書、73 頁。
- 4 『ホロコースト』、毎日新聞社、1999 年。
- 5 *Auschwitz, A History in Photographs*, 1995.
- 6 *ibid.*, p.255.
- 7 *ibid.*, p.230.
- 8 David Olère & Alexander Oler, *Witness Images of Auschwitz*, North Richland Hills, 1998.
- 9 オレールは 1983 年にパリで死んでいるが、「病死ではなく、大学の『知識人』がオレールが個人的に目撃した虐殺は存在せず、シオニストの宣伝であると話しているのを聞いて、憤死した」という。  
*Witness*, p.108.
- 10 <http://www.dfscott.com/witness.asp>
- 11 この裁判とベルト報告については、拙稿「第二次大戦に関する歴史的修正主義の現況 (4): アーヴィング vs. リップシュタット裁判より」、文教大学教育学部紀要 (34)、2000 年を参照していただきたい。

12 David Olère; *The Eyes of a Witness*, p. 45



David Olère; *The Eyes of a Witness*, p. 47



13 <http://www.focal.org/lipstadt/pelt/report.zip>, pp.97-99.

14 アウシュヴィッツその他の収容所の焼却棟の炎についての「目撃証言」の事例は、フォルジュ、前掲書、64-65頁。

15 C.Mattogno, *Auschwitz The End of a Legend*, Newport Beach, 1994, p.19.

16 G.Rudolf, Critique of Claims Made by Robert Jan Van Pelt,  
<http://www.vho.org/GB/Contributions/RudolfOnVanPelt.html>

17 フォルジュ、前掲書、64-65頁、83頁。

18 *Witness*, p.18.

19 *ibid.*, p.26.



- 20 B.Kulaszka,*Did Six Million Really Die ? Report of the Evidence in the Canadian "False News" Trial off Ernst Zundel-1988*,Tronto,1992.p.60.
- 21 <http://www.focal.org/lipstadt/pelt/report.zip>.,p.240.
- 22 G.Rudolf,Critique of the "Findings on Justification"by Judge Gray.
- 23 Samuel Crowell,Technique and Operation of German Anti-Gas Shelters in World War II.  
<http://www.codoh.com/incon/incompressac.html>
- 24 <http://history1900s.about.com/homework/history1900s/mbody.htm>
- 25 <http://www.focal.org/lipstadt/pelt/report.zip>.,p.247.
- 26 G.Rudolf,Critique of the "Findings on Justification"by Judge Gray.